

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：23503

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K21631

研究課題名（和文）近世英国と日本における書物文化の偶発的パラレリズム研究

研究課題名（英文）A Study of Pararellism in Book Culture in Early Modern Japan and Britain

研究代表者

高野 美千代（Takano, Michiyo）

山梨県立大学・国際政策学部・准教授

研究者番号：10289811

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本課題においては「近世の日本とイギリスの書物文化には偶発的な類似点が多く存在している」と仮定して、そのことを証明するために書物史の複数の観点から主題にアプローチして実証的な研究を進めた。一例として、17世紀には日英両国で商業出版が盛んになり、主要書籍商の活躍が顕著となったことから、京都の八文字屋とロンドンのチズウェルを例に出版活動を比較検討し、とくに顧客獲得方法の工夫における類似点を扱った。また、読書文化の広まりに関する比較研究の対象として、若者向けの書物を取り上げ、17世紀の日本と英国における教養や社会通念の形成について論じた。さらに、好古学/国学研究についても複数の観点から考究を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題においては、これまで明らかにされてこなかった17世紀を中心とする近世日英書物文化の並行現象について考究し、その成果を発表・発信することを試みた。また、海外の研究者や、稀覯本を専門に扱う国内外の書籍商等より助言を得ながら、幅広い視点から課題に取り組み、書物の制作・流通、書物の受容、読書文化の広まりなど、英文学研究において作品のテキスト解釈以外を研究対象とすることの可能性を提示することができた。さらに、国際的な研究交流を通して、日英書物史比較研究が海外研究者からも関心を持たれるものであると認識し、継続して考究を深める価値があることを確信した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to specifically identify the curious similarities between the book cultures of Japan and England in the early modern period, despite the geographical distance between the two countries. To illustrate, since commercial publishing began to flourish in the 17th century and the activities of major book merchants became prominent in both countries, I have compared the publishing activities of Hachimonjiya in Kyoto and Richard Chiswell in London, and have focused on the way they devised methods to attract customers. Book reading and book collecting by individuals have also been examined, in an attempt to prove that there is a kind of parallelism between early modern Japanese and English book culture. .

研究分野：英文学、英国文化、書物史

キーワード：書物史 Richard Chiswell 日英比較研究 prison literature conduct book

1. 研究開始当初の背景

本課題では、「近世日英書物文化には偶発的類似が多く存在する」と仮定し、それを実証的に研究することで、今後の書物史研究の発展の可能性を開拓することを試みようとした。このテーマは、筆者が長年にわたり17世紀英文学を考察してきた中で発見したものであり、国内外において、詳細な研究はほぼ行われていなかった。当初すでに着手していた部分（たとえば主要書籍商の活動）に加えて、近世日英における書物史の多様な事項に注目し、比較研究を丁寧に進め、パラレリズムを実証していくことで、近世日英書物史比較研究の基礎を築くことを意図した。

2. 研究の目的

上記の通り、本課題は「近世日英書物文化には偶発的類似が多く存在する」ことを実証的に研究し、今後の英文学、書物史研究の領域の拡大と発展の可能性を模索し開拓することを目的とした。筆者は英文学・英国文化を専門に研究してきたが、本研究においては書物の作家作品だけでなく、読者・出版者の存在を重視し、さらに日英2カ国の書物文化の国際的かつ学際的な比較研究によって、新たな研究領域を開拓することを目指した。

3. 研究の方法

本研究を進めるにあたって、主につぎの事項について考究を行うこととした。

(1) 近世英国と日本の書物の出版と流通

ロンドンのRichard Chiswellと京都の八文字屋八左衛門をはじめとする数名を選定し、そのビジネスの規模や扱うジャンル、顧客獲得方法、同業者組合との関係、出版統制の影響といった点に注目して比較検討を行い、出版が社会や個人にどのような影響を与えたのかを考察した。

(2) 近世英国と日本における読書と庶民の生活

日英両国において庶民に読書がどのように浸透していたのかを、識字率と教育、印刷物のジャンルといった点に特に注目して探究し、読書の文化から知ることができる両国の庶民の生活の一面を比較検証した。

(3) 近世英国と日本の蔵書文化

17世紀英国と日本において、書物愛好家による蔵書文化も花開く。誰が、何を、どのような意図で蒐集したのかを考究する。英国では官僚・日記作家のSamuel Pepys（現在はケンブリッジ大学ピープスライブラリ）、英国国教会司祭のJohn Cosin（ダラム大学カズンライブラリ）、日本では名古屋市蓬左文庫に見る徳川家の蔵書、Pepysとほぼ同年代の水戸光圀による書物蒐集などがあるが、本課題では、さらに小規模の個人蔵書などの掘り起こし作業を含めて比較検討を行う。

また、本課題は国際的かつ学際的研究によって最も成果が上がるものと考え、日英両国の文学と歴史研究者による協働作業を展開することとした。

4. 研究成果

2019（R1）年度においては、日英の読書文化を比較検討するため、十七世紀に出版された英語文献から、歴史書、コンダクトブック、宗教書から、極めて特徴的な文献を選び、同じころ日本で出版された書物を比較検討することとした。書物に共通するテーマ、読者層、出版者、著者、書物の装丁など、本を構成する複数の要素からの考察を開始した。

これと同時並行して、近世英国と日本の書物の出版と流通に関する検討を進めるため、ロンドンの書籍商リチャード・チズウェルと京都の八文字屋八左衛門をはじめとする数名を選定し、そのビジネスの規模や扱うジャンル、顧客獲得方法、同業者組合との関係、出版統制の影響といった点に注目して比較検討を開始した。初年度実績としては日本の出版業者の考察までには至らなかったのであるが、調査に必要な基本的文献を調査収集し、以降の研究に必須となる資料を多く入手することができたのは収穫であった。ロンドン書籍商に関しては、チズウェル以外の主要書籍商による出版物の確認作業、個別の書籍商の政治的宗教的スタンスと扱った出版物の傾向の分析に取りかかった。

2020（R2）年度は、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが発生し、当初より予定していた英国での現地調査・共同研究は全く実施できなかった。国内での活動にも大きな制限が発生したが、一方で、文献資料の精読、論考の執筆・投稿等は順調に進んだ。社会の中の様々な階層・グループにおいて共通した教養が形成されていったことを例証するために、近世の日英で若者向けに書かれた作法書の部類に属す書物の比較研究を行い、その成果を論文にまとめた。17世紀以降、日英両国において若い男女が知識教養と生きる指針を身に付けられるような作法書の普及が見られるようになった。具体的には、若い男性向けの『イングランドの紳士』*The English Gentleman*、若い女性向けの『イングランドの淑女』*The English Gentlewoman*がリチャード・ブレイスウェイト（Richard Brathwaite, 1587/8 - 1673）によって著され、日本では苗村丈伯（生没年不詳）による『女重宝記』、『男重宝記』が1690年代に世に出されたことを並列して考察を試みた。

ブレイスウェイトの著書は、イタリアルネサンス期の教養ある宮廷人を模範とし、それを英国の紳士淑女のあり方にいわば応用して読者の徳性を涵養していくものとなった。中世から近世へと移行する中で、新たな規範を求めようとする時代の要請に応える内容であったことは間違いない。17世紀の日本においてもそれは同様で、とくに17世紀後半には文治政治のもと、洗練

された礼儀作法を身につけることが人々の関心事に含まれるようになり、それは上層階級に限定されない範囲に及んでいった。重宝記は、文学・芸術・芸芸が花開いた元禄時代の頃に流行が始まった。知識が重視され、教育が重んじられるようになったことを『女重宝記』、『男重宝記』の普及から読み取ることができる。『女重宝記』が版を重ねた背景には女性による読書の文化の広がりがあり、また、『男重宝記』に関して言えば、商業と都市の発展によって、商人として台頭していく男性にとって、たしなみや行儀作法の知識が必要とされる時代となったことが示唆されるものと考えられる。近世という時代が東西で作り上げた現象のひとつを、17世紀の日英書物を通して証明していくものとした。

2021(R3)年度は、近世日英の書物に共通する事項、具体的には、好古学/国学に関連する有職故実の研究や、街道絵図等に新たな題材を見出し、資料を調査収集し、精読することに重点を置いた。まず、街道絵図や地図に注目することとした。一般の人々がより頻繁にあるいは気軽に旅行を始めるようになった17世紀頃からは、街道絵図や地図の出版・流通が日英両国で盛んとなった。一方の有職故実日本国内では中世よりその研究が知られているが、英国においても16世紀あたりからは同様の学問研究が見られるようになる。とくに日英における好古学/国学研究の発展は、極めて重要な課題であり、今後さらに検討を進めるべき意義を見いだした。

近世日英街道絵図の比較研究に関しては、科研費国際研究集会を2022年1月にオンラインで開催し、論文にまとめたものを口頭で発表した。*Chorographia Britanniae, or a new set of maps of all the counties in England and Wales (1742)*と『東海木曾両道中懐宝図鑑』(1765)の比較研究である。これについては国内外の研究者から大変興味を持たれ、有意義なコメントと課題を与えられたので、引き続き考察を進めている。本課題で注目している17世紀を中心とする日英書物の発展は、実際には接点がなく、偶然同じような時期に発生した事象であると考えられるが、近世という時代における東西の人間の営みがいかに類似した形態をもって書物にあらわれたのかを様々な領域の文献から知ることとなった。近世英国の有職故実研究については英国の紋章官イライアス・アシュモール(Elias Ashmole, 1617-92)の著作*The History of the Order of the Garter* (1672)を例にして考察をまとめ、発表した。なお、コロナウイルスの影響による研究の遅延により、当初2021年度までの計画であった本課題には2022年度以降も取り組むことが認められた。

2022(R4)年度は、近世の日英両国において庶民に読書がどのように浸透していたのかを、識字率と教育、印刷物のジャンルといった点に注目した研究を継続し、読書の文化から知ることができる両国の庶民の生活について比較研究を展開した。基礎的な文献資料の調査収集作業を進め、それらを精査した。この時点に至ってもなお世界的なパンデミックの影響が長く残っていたため、国内外における現地調査が計画(あるいは希望していた)通りに行えたとはいえない。当初は蔵書文化についての研究を展開し、図書館等の公的機関に保管されているコレクションを実際に訪れて研究することや、個人レベルで行われた書物蒐集・蔵書文化の日英比較研究を行うプランが念頭にあった。しかしながら、具体的な計画を立てるための条件・環境が整わず、これについては実施を見送ることとした。ただし、近世書物文化の様々な側面を研究するため、できる範囲ではあるが積極的に文献資料収集を実施した。また、海外研究協力者とはオンラインおよび対面にて意見交換・情報交換を行うことができ、本研究課題のとりまとめまでの方向性を確認することができた。

海外研究協力者と共に17世紀英国の庶民が読書をした目的・動機を考察する中で、プリズン文学というジャンルの研究を示唆され、試論を書き上げて発表した。プリズン文学は日本にも存在するものであるため、比較研究を実施するレベルまで掘り下げていきたい。これと関連して、宗教や歴史を題材とする書物が17世紀の日本と英国でどのように世に出され、また、受容されていたのかということについて、海外研究協力者とともに考察を始めた。

2023(R5)年度は研究とりまとめを行った。海外から研究協力者(英国スターリング大学アンガス・ヴァイン氏)を招聘し、対面での共同研究を進めることができ、新たな研究テーマを発見することに結びついた。本研究課題の具体的な研究成果にはつぎのようなものが挙げられる。近世英国と日本の書物の出版と流通に関しての検討を進め、ロンドンの書籍商チズウェルと京都の八文字屋等のビジネスの規模や扱うジャンル、顧客獲得方法、出版統制の影響といった点に注目して比較検討を試み、成果をまとめた論考を執筆した。日英両国において17世紀に普及した、若い男女が知識教養を身に付けられるような書物(作法書)を取り上げて比較研究を行った。17世紀英国の庶民が読書をした目的・動機を考察する中で、英国オックスフォード大学の研究協力者から示唆され、プリズン文学という特殊なジャンルに注目し、考察を始め、試論を発表した。好古学/国学に関連する有職故実の研究や、街道絵図等に新たな題材を見出して論考を発表し、国際研究集会(オンライン)において海外研究者と意見交換をする場を設けた。最終年度には、研究協力者を英国スターリング大学から招聘し、おもに17世紀に出版された日英の書物に関しての比較研究を進めた。研究協力者を講師に迎えて開催した近世英国書物を扱う講演会は、研究者だけでなく大学生や外部一般にも公開し、活発な質疑も行われることとなり、研究成果を社会に還元することができた。以上のように、延長期間を含めて多くの成果を上げることができたが、その一方では、研究の過程で新たなかつ重要な課題をつぎつぎと発見したため、実際には積み残した部分が多く存在することを認めざるを得ない。これは貴重な知見の獲得であり、したがって、今後も継続して地道な作業に取り組み、さらに研究を深化・発展させたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 高野美千代	4. 巻 18
2. 論文標題 プリズン文学としての『天路歷程』 投獄と解放の記録	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山梨国際研究	6. 最初と最後の頁 43, 52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高野美千代	4. 巻 18
2. 論文標題 アシュモールとホラーによるガーター騎士団の記録	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山梨国際研究	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高野美千代	4. 巻 16
2. 論文標題 17世紀日英における若者向け作法書 - その普及と背景	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山梨国際研究	6. 最初と最後の頁 47, 58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Michiyo Takano	4. 巻 15
2. 論文標題 John Bunyan's The Pilgrim's Progress in Japan: Early Translations	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山梨国際研究	6. 最初と最後の頁 37, 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Michiyo Takano
2. 発表標題 The development of antiquarian studies: atlases and topography
3. 学会等名 科研費国際研究集会（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 高野美千代	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ブイツーソリューション	5. 総ページ数 186
3. 書名 17世紀英国の書物の世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	パリー グレアム (Parry Graham)	英国ヨーク大学・名誉教授	
研究協力者	ヴァイン アンガス (Vine Angus)	英国スターリング大学・准教授	
研究協力者	サウスコム ジョージ (Southcombe George)	英国オックスフォード大学・講師	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Inquiries into and the Establishment of British Identity by William Camden and His Successors (オンライン研究集会)	開催年 2022年～2022年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	ヨーク大学	スターリング大学	オックスフォード大学	
デンマーク	オーフス大学			